



魚タラシ

おぎまちみらいかいぎ

「町を舞台に」重要伝統的建造物群保存地区選定の町並みを120%活かす未来をデザインした報告書

主催：小木まちづくり協議会

事務局 小木行政サービスセンター内

ワークショップ実施日

2026年1月20日／2月7日

町を舞台に。おぎまちみらいまつぷ

重要伝統的建造物群保存地区に選定された小木町の未来像を考えたワークショップで話し合われたものをマップに落とし込みました。



- 「住民が小木町の魅力を持ち寄る基地」
- 「全員ガイドの基地」
- 「写真アーカイブの拠点」
- 「やさしい人情でもてなす資源プロデュース基地」
- 「まちづくり法人の基地」

本町通りのどこかに拠点ができている

全てのエリアで
一人ひとりが
一箱のお店を出す



一人ひとりが町のあちこちで小さな小さなお店を開く『プチ七日市』がかわいいと島内の若者に人気になっていて、知らず知らずのうちにまちを歩き回って小木町のファンになっている。

ガイド本と
スマホで歩けるように
なっている



たらい舟は、小木町にとって大切なブランド。活用策を常に考えていきたい。

たらい舟の体験に加え
小木おけさ、そば打ち
竹かごづくり、謎解きまちあるき
など体験メニューを充実

パーク&ウォーキング



スマホ対応・カーシェアリング

木崎神社は后神社。
この物語が磨かれ注目の聖地となる。

世界遺産の佐渡金山とのつながりが、大いに語られる。語る主は「コノハナサクヤヒメ」。桜の花が咲き誇るように美しい后が語り出す。

おぎまちみらいかいぎ

主催：小木まちづくり協議会



↑この色がついている建物は、個別に調査が入り解説がある。ひとつずつ許可を得たところからストーリーをつくりたい。

建物の歴史ストーリー まち歩き



照覚寺・安隆寺周辺ほか景観ポイントが発掘・整備されている

消防車が入れるよう整備
通りからの景観を守り
稲荷町・琴平町の防災拠点

家印が各家について
町並みを彩っている

小学生がチャレンジショップ

鬼太鼓長屋・ものづくり長屋

パーク&ウォーキング



スマホ対応・カーシェアリング

みんなの庭

生ゴミを堆肥にする
コンポストを設置。
住民みんなが関わる。

まちのひとみんなが
ガイドできている





未来のデザイン

町人文化を町人自らが伝える基地を中心に

町全体で、やさしくおおらかな人情に触れることができる。



●基地にはまちの人一人ひとりが好きなスポット・町並み・景観がパネルで紹介されている。

●町人文化を伝えるエピソードを取材した記事がストックされ、紹介されている。

●写真アーカイブの拠点が空き家を活用して運営され、働く代わりに無料で滞在でき

るようになっていく。アーカイブ拠点はフォトコンも開催。

●まちの人が自分のまちをよく知り、全員がガイド役となっている。

●芸能・工芸・食に関する展示を行い、体験や食事、土産物購入ができる場所を空き家を活用しプロデュースしたい。この場を

演出するのは小木町の「やさしい人情」。

●リアルな今の町人文化に出会える『フチ七日市』が開催されている。一人ひとりが

町のあちこちで小さな小さなお店を開く『フチ七日市』がかわいいと島内の若者に人気になっていて、知らず知らずのうちにまちを歩き回って小木町のファンになっている。

未来のデザイン

歩いて楽しい工夫がさりげなく

「まちの現場」と「デジタル」で展開されている。

木崎神社は重要な鍵。ここからまち歩きの大きなうねりが育っていく。

●「金の積出港」と「小木町の祭礼」の物語を磨き上げ、全国の注目を集めて修復優先度があがった木崎神社は、まち歩きの出発点として有名になっている。

修復の費用をクラウドファンディングで全国から集めることも可能。佐渡市と連携して「文化財保護」を目的としたふるさと納税型クラウドファンディング(GCF)での実施も検討したい。

●歩くだけではなく「体験プログラム」が年間を通して計画され「決まった日にここで体験できる」ことが決まっている(たらい舟・そば打ち・小木おけさ・竹籠づくり・土人形絵付け・謎解き)。

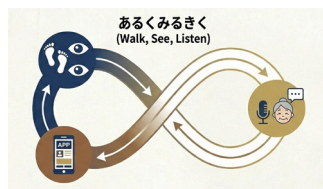
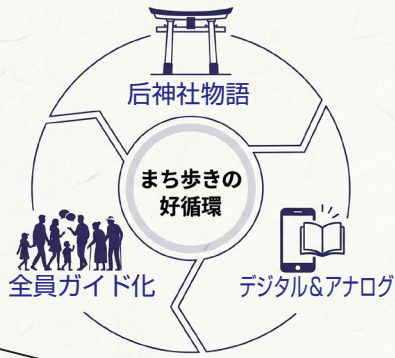
●『小木町の歩き方』定番本を基軸に、詳細はQRコードで古い写真もその場でスマホをかざすだけで見られるようになっていく。アプリ化された『小木町の歩き方』は、出会った小路の名前やエピソードを教えてください。多言語対応となっていて、お

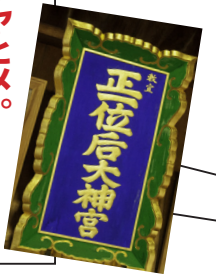
土産も提案してくれる。

●『歩いてみたい・また歩きたい』と期待感を高めて誘う日々の情報発信がSNSでそこそこのフォロワー数を得ている。

●田楽提灯でほかのまちと比べて『明るい夜・通り』になっていることを活かした『夜のまち歩き』にファンが定着している。夜間の経済活動を活性化できる(ナイトエコノミー)。

●知的好奇心をくすぐる『建物の歴史ス





**コノハナサクヤヒメ。
繁栄(金)のリレーをつなぐ
桜の花が咲き誇るように
美しい后を語ろう!**



(イラストはイメージ)

木崎神社は、佐渡代官の大久保長安が佐渡金銀山【世界遺産】の反映と金銀輸送の安全を祈願し、慶長14年(一六〇九年)に創建されました。祭神は木花開耶姫命(このはなさくやひめのみこと)で、古くは后神社とも記されています。コノハナサクヤヒメが、アマテラスの孫の正妻(皇后)だったことから「后神社」とも記されたのです。桜の花が咲き誇るように美しい「后」が木崎神社の祭神です。またコノハナサクヤヒメの父は「山の神」です。金銀山からの輸送で一時保管庫の役割を果たした后神社ですから、父から娘へとつなげた「繁栄のリレー」を物語ってくれるでしょう。



建物の歴史ストーリーまち歩き



夜のまち歩き (ナイトエコノミー)

未来のデザイン

**生態系再生を学ぶスタディツアーが
生活観光ツアーも!
農業・漁業・林業の分野で実施されている。**

『トリーまち歩き』が建築マニアを核に広がり、特に修復の過程を見ることが出来るツアーは、マスコミが定期的に報道するようになった。(※『佐渡市小木町 伝統的建造物群保存対策調査報告書』に個別解説が

あり、許可を得たところを手始めに) ●「コ」だけでなく私にガイドさせて講座や「町民ウォークラリー」が開かれ、「全員ガイド」にしなしたと近づいていく。 ●まち歩きの「ガイド人材」「コンテンツ」

を常に生み出す仕組みが回り続けている。その源泉は、「あるくみるきく」と題した足を使って現場を調査し、写真・動画に記録し、レジェンドに話を聞いてテキストにする活動。

※ワークショップ参加者の関心がそれほど高まらなかったが、**小木町の大地が語る物語**(砂州によって陸地と地続きになった城山(陸繋島)と内の澗・外の澗)・(佐渡小木地震)(復興の創意工夫・三味線堀・町並み・石垣)にも着目したい。まちの形成に決定的な影響を与えている。

●小木の食を育てるには、食べるメニューを考えるだけでなく「農」「漁」の現場を知ることが重要で、食品のパッケージデザインや売り方に工夫が生まれるほか、ツアーが組まれ体験プログラムが用意されている。

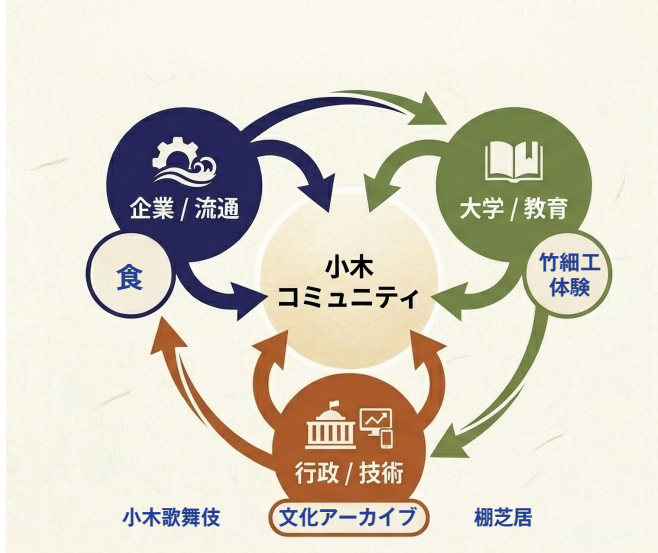
●釣りの観光客が釣った魚を漁協に持って行くと、町で使えるクーポンがもらえるようになっていく。

●小木町の「祭礼などの非日常(ハレ)」と「生業や居住などの日常(ケ)」が港町としての歴史や空間構成と深く結びついていることを学ぶツアーが行われている。【生活観光ツアー】

●地域の自然環境保全、独自文化、住民生活への配慮、観光業の活性化を両立させるサステナブルツーリズムへの人気が高まっている。竹林の現場にも行ってみよう。

【生活観光ツアー】

小木独自の文化（芸能・工芸・食）は 記録しアーカイブ化を進め、 コミュニティの力・行政・大学との連携で守られている。



●小木町は北前船によって上方文化が直輸入され、そのひとつに「地芝居（農村歌舞伎）」があり、**小木歌舞伎**として独自に発展し、佐渡の歌舞伎の重要な源流となりましたが、今はその姿を見ることができません。小木歌舞伎をデジタル技術を使って上演風景を再現するなど「**小木独自の文化**」のアーカイブ化と**展示する場所の設置**を提案。琴平座・祭りだな（屋台）も同様にアーカイブ化が必要で、「木崎神社神輿・小獅子舞・大獅子舞・鬼太鼓・小木おけさほか」も現役のうちにアーカイブ化しておく必要性を感じる。（※かつては「棚芝居が本町・中町・諏訪町で行われていた」）

●小木港まつりの祭礼を彩る芸能を守っていくために外からの「**手伝**」「**子どもの参加**」を促す仕組みが整い、人口減少による消滅を免れている。

●竹細工はかつて小木の真竹を本土に送っていたほど材料には恵まれていたが、今は放置竹林が増える様子が心が痛む。**佐渡御用籠**が再び商品化されることや**竹製おけさ**人形の復活を願うが、大学との連携・協力など**文化面・教育面**で残したい。体験学習が軌道に乗れば、資金も得られるようになるかもしれない。

●**小木そば**には、「たばこの裏作だった」など独自の物語があり、それらを使ってブランド化する。

●**経島せんべい**・あやめ団子など昔の食の復活が喜ばれている。

●わかめ・岩のりは、材料の確保など課題があり、「産官学との連携・協働」「大手企業とのタイアップ」など外の力が必要。

●小木海岸での「**岩ガキの養殖**」が試験的に始まっていたのが、新たな小木町の特産になっている。（現在は試験的）

竹細工の技術を守るには放置竹林から始める

真竹の産地だった竹林を再生→教育・体験学習
竹細工ワークショップ



安心でわくわくする「空き家」活用と、まちづくり組織のパワーアップで、新しい事業領域を少し広げ、地域と生活資源の循環が図られている。



空き家活用のパラダイムシフト:「逆発想」のマッチング戦略
 物件情報の公開ではなく、「人の想い」を起点に流動性を生み出す

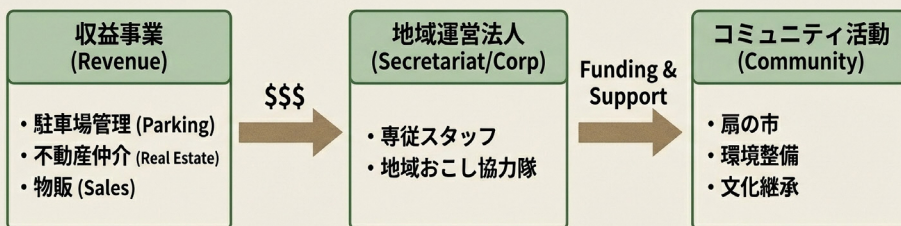
●空き家の流動性を高め、危ない空き家をつくらない仕組みが必要。島外の家主さんとなぐ地元の人が活躍する。さらに重要な点は、空き家になんとか借りてくれる人を探すのではなく、「人」のやりたいことを起点に空き家を活用する逆発想のマッチング。空き家情報を公開するにも、どんな危険が起きるか心配。誰にでも貸せるといつことには多くの場合ならないだろうから。

●芸能の担い手を優遇する「おんてこ長屋」、ものづくりの担い手を優遇する「ものづくり長屋」ができ、小木マイスター認定制度や職人に会うツーリズムなどそれらを支える事業がいくつか生まれている。わくわくする空き家活用が生まれて欲しい。

●扇の市をきっかけに空き家を活用する多様な業態の店舗が生まれる。

- 持続可能な事務局力を高め（協力隊など）、コミュニティが持続するための行事やイベントを行う。
- 駐車場管理を行うなど安定的な資金が確保された法人の設立を進める。
- 医療のデジタル活用（オンライン診療）を進める事業を行う（石見銀山の事例）。
- まちづくりの拠点がつくられ、いくつかの領域を持つ事業が展開されている。
- 【空き家見守り&活用】【地域育成ラボ（インキュベーター）】【医療・福祉支援】【ものづくり支援】
- 小木町のガイド情報・医療情報・生活情報などAーを活用した情報共有が便利になっている。
- 小木小チャレンジショップが、扇の市で実験的に実施され、それが定期的なものとなっていく。次世代の担い手が誕生する地域育成ラボ（インキュベーター）となる。
- ひと休みできる公共の場として「みんなの庭」が本町通り町屋奥にある石蔵の裏にできあがっている。家庭こみを土に還元し、土壌を豊かにする環境に優しい取り組みがそこで行われている。【コンポスト】
- 竹林の再生と竹細工ワークショップが実施され、竹細工技術を守りながら放置竹林が起す災害を防ぐ活動に挑んでいる。
- 一次産業の保護を進めたい。
- 小比叡・元小木でホテルが見られる田んぼをつくりたい。

安定的な自主財源を持つ、持続可能な事務局 活動を止めないためのエンジンの設計

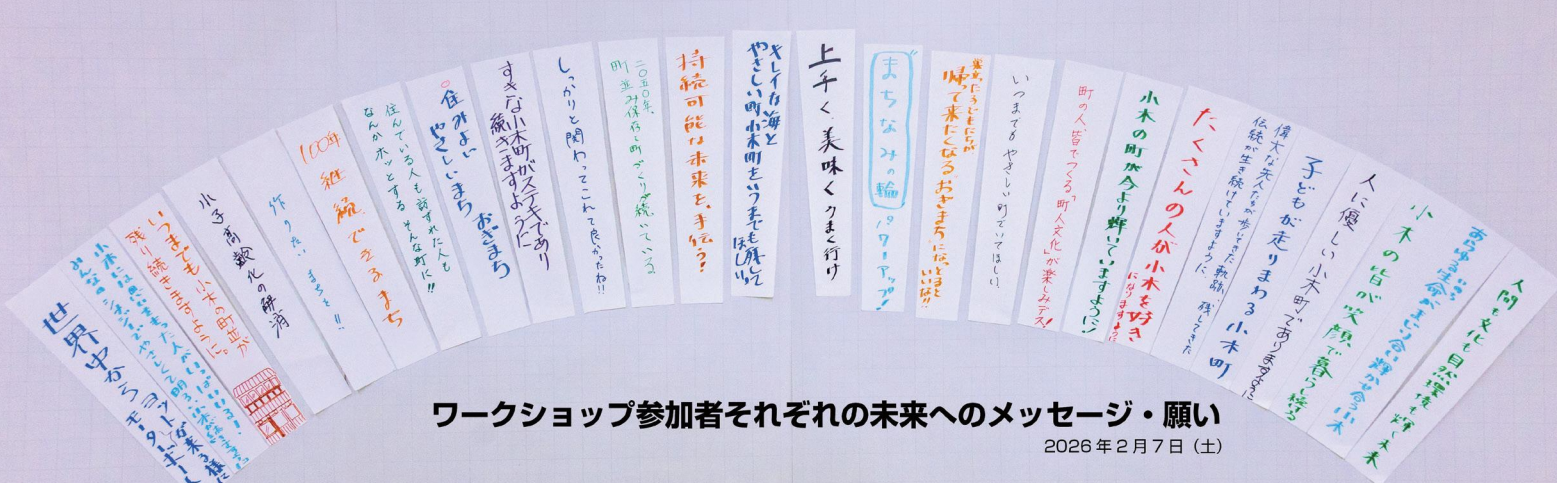


補助金頼みでは、補助金の切れ目が活動の切れ目になる。
 駐車場管理などで安定的な自主財源を確保し、非営利のコミュニティ活動を永続的に支える。

Key Insight Box

「稼ぐ」と「使う」のバランス。経済活動で得た利益を、文化と自然へ再投資する循環構造をつくる。

小さい町にたくさんの組織があり、新しい組織をつくって連携する面倒や手順を増やすよりも、シンプルに運営ができる方向に進んだほうが未来は明るい。

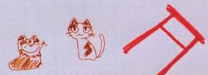


ワークショップ参加者それぞれの未来へのメッセージ・願い

2026年2月7日(土)

おぎまちみらいかいぎ

主催：小木まちづくり協議会



第一回おぎまちみらいかいぎ ワークショップ後のふりかえり

①参加者の多様性と「新しいつながり」への喜び

最も多くの人が言及していたのが、参加者の顔ぶれが新しく積極的だったと少し驚いています。

若手・移住者の参画：「若い年代が多い」「移住された方がたくさん参加してくれた」という声が非常に多く、世代や背景を超えた交流に満足感を得ています。

新鮮な視点：「自分とは違う視点」「外部の視点」に触れることで、当たり前だと思っていた小木の良さを再発見したという意見が目立ちました。

人柄の再確認：「小木の人柄の良さが評価されている」「みんな小木が大好き」といった、地域への愛着を再確認する場となりました。

②「地域資源（文化・芸能・食）」への高い関心

小木の未来を考える上でのキーワードとして、特定の資源に意見が集中しています。

第二回おぎまちみらいかいぎ ワークショップ後のふりかえり

①「参加者の熱量」と「多様性」は素晴らしいものだった

地元愛の再確認：参加者全員が「小木が大好き」であること、真剣に未来を考えていることに感動したという声が多数。

若者の参加への喜び：特に年配の参加者から「若い人が来てくれて嬉しい」「若者のパワーを感じた」という声が多く、希望として受け止められています。

多様な属性：漁師、農業、大工、デジタル人材など、多様なバックグラウンドを持つ人が対等に話し合えたことへの満足度が高いです。

文化・伝統芸能：「芸能、工芸、食、人地形」を一体的に体験できる仕組みの必要性や、「神社・祭り」の大切さを説く声が多くありました。

竹製品・竹細工：複数の参加者が竹細工の価値を再認識しており、小木のアイデンティティの一つとして共有されています。

「生活感」の魅力：観光資源としてだけでなく、「日々の生活感」そのものに魅力があるという気づきも、今後のまちづくりのヒントになりそうです。

③地域課題に対する「危機感」と「前向きな姿勢」

現状への不安を抱えつつも、それをどう変えていくかという前向きな姿勢がありました。

人口減少と空き家：「空き家の活用」「人口減少への不安」は共通の課題として認識されています。

②最大の気づき・課題は

「誰がやるのか」「継続性」だった

「誰がやるのか」：「アイデアは出るがプレイヤーがいない」「誰かやるかが一番難しく大事な」という意見が頻出しました。

覚悟の必要性：「誰かがやるだろう、では誰もやらない」という厳しい認識も持たれています。

組織化：アイデアを統合・実現するための「組織」や「拠点」が必要。

継続性：「3ヶ月ごとに開催してほしい」「少しずつでも長く続けることが大事」という継続への意欲。

の気持ち尊重して協働する」「若者は学ぶ姿勢を忘れない」といった、世代間の歩み寄りが必要だという具体的な気づきも見られました。

ハードからソフトへ：インフラ（無電柱化など）だけでなく、文化や人、コミュニティといったソフト面での掛け合わせを重視する意見が出ています。

④運営面へのフィードバックと今後の期待時間の不足：「もっと話したかった」「1日あっても足りない」という意見・感想が多く見られます。

実行（アクション）への意欲：「何につながるか不安」という正直な懸念がある一方で、「できる範囲で実行に移したい」「具体的なアイデアを出したい」という、単なる話し合いに終わらせない意欲をもった方もいます。

資金：具体化するための資金面への懸念。

③新しい人材・テーマ・価値への関心が高まった

デジタル活用：デジタルに強い人材の存在や、アプリ開発（おぎアプリ）への期待。

歴史・文化：北前船、町人文化など、歴史的背景を知ることの面白さ。

共生・自律：「コンヴィヴィアル（自立共生）」「小さな自律共生型」といった、新しいまちづくりの概念への共感。

その他：空き家問題、産業、コンポスト（農業）など。